

*講演 「厚沢部町行政の取り組みについて」 渋田正巳厚沢部町長

- ・海のない、農業一本の町であり、林業 40 億、農業 50 億の時代もあった。
- ・WTO の行方が町の将来に大きく影響する。
- ・農業の生い立ち（基本整備）
 - ・農業涵排ダム建設（S45～H9：288 億）
 - ・国営農地開発事業（S48～H5：83.5 億：841ha）
 - ・（有）農業振興公社（平成 5 年 4 月設立：農協、町が同額出資）
 - ・農業従事者の高齢化に対応した取り組みが目的
 - ・農業後継者の実習(1 年間)
 - ・農薬の空中散布(リモコンヘリ 6 機)
 - ・農協組合長、町長が代表権を持つ
 - ・職員は、当初 2 名からスタート(農協 1 名、町 1 名) → 現在 10 数名
 - ・現在、税務対策として、年間 300 万～500 万を町へ寄付している
 - ・農業活性化センター（平成 4 年設立）
 - ・作付技術の研究 ・適作種、銘柄の確保、品種改良
 - ・糖度日本一のスイトコーンの開発
 - ・野菜の生産化安定基金（昭和 61 年創立）
 - ・野菜の価格保証制度基金
 - ・当初、農協と町が同額出資(1,000 万)
 - 現在は、2,600 万 + 販売額 2%(大根、人参、キャベツ、カボチャ)
 - ・野菜集出荷施設
 - ・ブロッコリーの作付面積は、94ha で、全量東京市場へ出荷している。優秀の評価を得て増産の要望があり、その体制をとっている。
 - ・失敗例…平成 6 年に大根の生産が日本一(豊頃町と競争)になったが、平成 7 年に原因不明の病害が発生、生産額が急減した。原因究明をしたところ、コンテナ運搬の際、積み方が悪く整列していなかったことによる傷の発生が要因と判明、コンテナを小型化(2 億)し、傷がつきづらい積み方に改良したことにより回復してきている。
 - ・ブロッコリー以外は、関西(大阪、京都、名古屋)方面の 100%出荷している。
 - ・メークインは、男爵に比べ煮崩れしづらく、高級志向の関西に需要がある。
 - ・連作障害に注意をしている。
 - ・農林省指定で原種採取(種子ばれいしょ)をしており、全量長崎県へ出荷している。管理は厳しいが、単価は高い。
 - *農家個々への意識づけが重要であり、品種改良、新しい作物(適作)の開発、銘柄確保等のために新しい方策を絶えず研究して行かなければならない。
 - ・さつまいも(黄金千貫)の生産
 - ・十勝(芽室町等)などで試験栽培をしたが、おもわしくなく厚沢部町で成果が出た。
 - ・札幌酒精の焼酎の原料として提供、生産量が増加安定した事を契機に、厚沢部での現地生産となった。(大麦も生産)

- ・ 温暖化の影響で、鹿児島県の生産量が3分の1に減少している。
- ・ 10a 当たりの生産量が、鹿児島県の3倍で、品質も優秀と評価され、計画生産の要望もあった。
 - ・ 鹿児島県での、黄金千貫の用途は、良質なものの約3分の1が、高級菓子(けんび)の原料(価格は焼酎の3倍、3分の2が焼酎の原料となっている。(厚沢部の黄金千貫は、良質で高級菓子原料となる比率が高いと評価していた。))
- ・ 本州物の野菜の出荷は、10月までが主流、十勝地方が10月からと、供給時期を調整して価格を維持する工夫をしている。厚沢部町では、端境期の11月から翌年3月まで出稼ぎをして収入を確保していたが、「年間農業」を目指し、12月から翌年2・3月まで供給できる「グリーンアスパラ」の生産を試行しており、100坪のハウスを60棟で共同出荷している。順調に推移しており増産していくこととなる。

* 基盤はできたので、あとは組合員(農家)の努力にかかっている。強い農家を育てていきたい。

* 8月24日、札幌で「地域経営塾 in 北海道」があり、末吉幸一総務省内閣参与等の講演を聞いた。道南の首長は、この塾にほとんど入っていない。

こらからの行政は、「行財政運営」から「行財政経営」に変わらなければもたない。時代の趨勢に乗れない町長は辞めなさい。意識改革で「経済経営」感覚に切り替えられない者は辞めなさい。先進、先輩の話聞く姿勢が大事だと話を結んだ。